

耳のフォークロア 身体感覚の民俗的基礎

小池淳一

Ear Folklore : A Folkloric Basis for Bodily Senses

KOIKE Jun'ichi

はじめに

① 耳塞ぎの呪法

② 「聴耳」と「蛙の大助」

③ 耳のかたちとそこに響くもの

まとめと今後の課題

【論文要旨】

本稿は耳をめぐるさまざまな民俗を取り上げて、身体的な感覚がどのように表出しているかについて考察を加えるものである。

ここではまず、耳塞ぎの呪法を取り上げた。これは同年齢の死者が出た際にそれを聞かないように一定の作法を耳に施す呪術である。従来は同齡感覚を示すものと捉えられてきたが、改めて考えると日常とは異なる状態を耳に食物をあてることで表現する民俗であり、そこには呪術の受け皿としての耳の性格を見いだすことができる。

次いで、耳に関する説話として「聴耳」、「蛙の大助」を検討した。「聴耳」は人間以外の動物の声を意味あるものとして聞くことが可能であるという認識の上に成り立っている説話で中世以降、陰陽道とも結びついて民俗的に展開している。「蛙の大助」は特定の日に川を遡上してくる蛙の発する声を聞かないようにする習俗の説明譚である。これは蛙の声を意識してはいるものの聞かないことに重点がある。こうした説話

の分析からは、耳が自然界の音と対峙するシンボルであることが浮かび上がってくる。さらに、耳に関する年中行事や俗信についても分析を加えた。耳鐘や盆行事における「地獄の釜の蓋」の伝承、カンカン地蔵、大黒の耳あけ、耳なしの琵琶法師、耳塚などの伝承を検討した。ここからは特定の条件のもとで、耳や音が神霊や怪異の世界とのつながりを持つことが、明らかとなった。

耳は聴覚器官であることはいままでもないが、民俗事象に表れる耳のイメージは聴覚だけではなく、耳のかたちとその変形を通して表出している。今後は聴覚のシンボルとしての耳だけではなく、視覚に関しても留意し、総合的に身体感覚をとらえていくことを目指したい。

【キーワード】 耳塞ぎ、「聴耳」、「蛙の大助」、年中行事、耳鐘、目